

氏 名(本 籍)	ラタニン・デワラジャ (スリランカ)				
学 位 の 種 類	学 術 博 士				
学 位 記 番 号	博 甲 第 824 号				
学位授与年月日	平成 3 年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当				
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科				
学 位 論 文 題 目	A STUDY OF THE IMPLICATIONS OF INTERHEMISPHERIC TRANSFER IN ALEXITHYMIA. — EVIDENCE FROM REACTION TIMES TO A Laterally PRESENTED VISUAL MATCHING TASK.—				
主 査	筑波大学教授	医学博士	佐々木	雄 二	
副 査	筑波大学助教授	教育学博士	海 保	博 之	
副 査	筑波大学助教授	医学博士	吉 岡	博 英	
副 査	筑波大学教授	医学博士	藤 田	紀 盛	

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は英文にて 4 部, 10 章, 本文 119 頁, 引用文献 14 頁, 資料 43 頁, 図表等 27 葉から成っている。

(2) 本論文の目的

心身症の特徴として「アレキシミア: alexithymia」(Nemiah and Sifneos; 1970) の概念が導入されて以来, その成因については心理学的, 社会学的, および生理学的アプローチなどによって, さまざまな検討が加えられているが, 未だ明確な結論は得られていない。アレキシミアの成因を説明する代表的な理論は i 大脳半球間情報移送不全説, ii 右脳半球機能低下説, および iii 右脳半球機能亢進説であるが, これらは主として器質的障害を有する分離脳患者を被験者にしたものであり推測の域を出ていないし, 健常者ないしは心身症者を対象にした心理生理学的研究はまだ極めて少ない。

そこで本研究は, 片側脳半球への視覚的刺激に対する反応時間の分析を通してアレキシミア傾向者の脳機能の機能不全ないしは機能偏位の可能性を探ることを主要な目的とした。

(3) 研究の方法と結果

実験 1 (calibration study) は, 実験装置および実験方法の妥当性と実験手法の有効性を確認する目的で行なわれた。具体的には 12 人の右利きの大学生を被験者とし, タキストスコープを用いて与えられた左右脳半球への画像刺激および文字刺激に対する反応時間が測定された。その結果, 言語的情報の処理は左脳半球においてより速く, また異なる半球間での情報処理時間は, 同一半球のそれと比較してより遅いことが確認され, 従来の他の実験手法を用いて得られている結果との比較検討によっ

て、本実験手法の妥当性と有効性が実証された。

実験2は、仮説：(1)高アレキシミア傾向者は低い人と比較して、異なる半球間での情報処理時間が長い、(2)アレキシミアは、左右いずれかの脳半球の機能亢進ないしは機能低下が関与している、の2点を検討するために行われた。

まず、730人の大学生に対しMMPIおよびSSPS-Rアレキシミア調査票を施行して、最高点域をマークした27人と最低得点域の26人を抽出し、それぞれ右利きであることを確認した後、高アレキシミア群と低アレキシミア群を構成した。実験方法は、実験1と同じ技法が用いられた。

その結果、右脳から左脳への脳梁経由の情報移送は、高アレキシミア群では文字刺激と比較すると画像刺激の移送がより遅かったが、文字刺激の移送に関しては、両群間に有意差は認められなかった。このことから、高アレキシミア群では、非言語的情報の脳半球間情報移送不全のあることが確認された。なお、アレキシミア傾向と各脳半球機能との間には相関はなく、高/低アレキシミア群における特定脳半球の機能亢進あるいは低下は実証されなかった。

実験3は、右脳半球から左脳半球への感情的情報の移送に焦点を置いて行われた。まず451人の大学生にTASを施行し、その最高得点域から22人、最低得点域から25人が抽出され、右利きであることが確認された上で被験者として選出された。実験では、タキストスコープで呈示された感情誘発的/感情中立的スライドに対する判断を音声言語で応答することが求められ、それによって感情的情報の大脳半球間移送に関連する反応時間が推測された。その結果、高/低アレキシミア群間で、感情的および非感情的情報の大脳半球間情報移送に有意差はみられなかった。

臨床的研究 (clinical pilot study) では、4人の心身症患者 (甲状腺機能低下症、気管支喘息、虚血性心疾患および斜頸) を被験者にして、上記の実験と同様の手法を用いて言語的/非言語的刺激を与え、その反応時間が測定された。その結果、気管支喘息、虚血性心疾患および斜頸の3患者において高アレキシミア群に特有の反応パターンが見られた。

審 査 の 要 旨

アレキシミアは近年、神経症と心身症の重要な相違点とされ、心身症患者にみられる特徴として注目を集めている概念であるが、その成因に関する学説は、器質的な分離脳患者からの推測や臨床的観察から得られたもので根拠はなお薄弱であり、むしろ概念が先行してきた感がある。本研究はアレキシミア研究において立ち遅れていた基礎的ないしは心理学的な立場からの研究であること、およびこれまで本領域で用いられていなかった半球間情報移送機能を推測するための反応時間検査法を駆使し、アレキシミアの脳生理学的な特徴の一端を実証的に検討したことに意義が認められる。アレキシミアの研究に関してはなお、刺激受容過程、認知判断過程、および反応表出過程のどこに本質的な問題があるのかについての検討も不十分である。本研究は、今後その点を整理する契機になる研究として位置づけられることが期待される。また本実験で用いられた心理学的検査法を発展させれば、アレキシミアのための臨床的検査法として利用されるようになることも考えられる。

実験3に関しては一部呈示スライドの内容や被験者の選択に問題を残したとはいうものの、大局的に見て本研究がアレキシミアの本質の解明に果たす意義は大きく、すぐれた研究であると認められる。

よって、著者は学術博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。